

「成立」と「存在」(3)

「タ形」と「テイル形」

小坂 光一

0. はじめに

「ある事象が成立する」ということはアスペクト的に見れば *dynamisch* な現象であり、「ある命題 / 命題内容 / 事象 / 状態が存在する」ということは *statisch* な様相を有する。日本語の「テイル形」は進行状態の存在、結果状態の存在などを表すことを考えれば *statisch* であると言える。しかし、「テイル形」の用法はこの2つに限られているわけではないし、さらにまた、その意味は直前の動詞句の種類や共起する副詞類などにも影響される。「ル形」と「テイル形」は一般的には完成相と継続相の対立とみなされるが、本稿では「タ形」から派生したと考えられる「テイル形」を想定し、「タ形」と「テイル形」がどのような関係にあるか、その場合の「テイル形」は何の存在を表すかについて考察したいと思う。なお、「タ形」から派生したと考えられる「テイル形」というのは次のようなものを指す。

- (1) 太郎はもう修士論文を書いている。（「もう修士論文を書いた」の解釈で）
- (2) 犯人は3日前にもここに来ている。（「3日前にもここに来た」の解釈で）

1. 「テイル形」

金田一(1950)などでは「～ている」の付加が可能かどうか、「～ている」の意味が「進行状態」であるか「結果の状態」であるかが、動詞句を分類する手段として使われている。筆者は一般的に「結果の状態」と言われている「～ている」に疑問を感じている。*punktuell-dynamisch* な動詞句に付加された「～ている」がすべて「結果の状態」を表すのであれば、「～ている」の現在形は常にSZ（発話

小坂光一

時)を含む Zeitintervall における状態を表現することができるはずである。すなわち、BZ(被観察時)として「今」を設定することができるはずである。確かに、(1)の「来る」の場合はそれが可能である。しかし、典型的な瞬間動詞であると言われている(2)の「到着する」や(3)の「死ぬ」などの場合は特別な場面を設定しない限り¹それがむずかしい。

- (1) ミュラーさんは今日本に来ている。
- (2) *ミュラーさんは今日本に到着している。
- (3) *私の祖父は今死んでいる。

時間副詞として「今」ではなく「もう」や「すでに」などを設定すれば「テイル形」も自然になる。

- (4) ミュラーさんはもう日本に到着している。
- (5) 私の祖父はすでに死んでいる。

しかし、この場合はBZ(被観察時)として「SZ(発話時)と重なる Zeitintervall」を指定したことにはならない。「SZ(発話時)と重なる Zeitintervall」というのは自然言語ではあくまでも「今」なのである。(4)と(5)の場合は「テイル形」を「タ形」に置き換えても基本的意味は同じであるが、(1)の場合は「~ている」を「た」に置き換えれば意味の変化が生じる。²

- (1') ミュラーさんは今日本に来た。
- (4) ミュラーさんはもう日本に到着した。
- (5') 私の祖父はすでに死んだ。

また、「もう~ている」はdurativ-dynamischな動詞句と共に用いることもできる。

¹ 特別な場面というのは例えば次のような場合である。

- あ、飛行機が到着している。(到着直後で、飛行機が眼前にある場合)
- あ、ネズミが死んでいる。(死骸が眼前にある場合)
- あいつ、最近死んでいるよ。(「死んだような状態」を意味している場合)
- このコンセントは今死んでいるよ。(「機能しない」のような意味を持つ場合)

詳しくは小坂(1996)参照。

² これと関連する内容のことは金水・工藤・沼田(2000)でも言われている(S. 36参照)。

- (6) 彼は今修士論文を書いている。
 (7) 彼はもう修士論文を書いている。

(6) は明らかに BZ（被観察時）における「進行状態」を表現しているが、(7) の方は BZ（被観察時）における「進行状態」にも解釈できるし、EZ（評価基準時）以前における「完了」の意味にも解釈できる。「進行状態」としての解釈の可否が durativ-dynamisch であるかないかの判断の尺度だとするならば、「修士論文を書く」は明らかに durativ-dynamisch である。

このようなことから判断するならば、punktuell-dynamisch な動詞句にも durativ-dynamisch な動詞句にもヴァリアンテがあるということが予想される。いずれにせよ、「テイル形」を動詞句の種類を判断する尺度として利用する場合は次のようになるだろう。

- 1 「テイル形」にできない動詞句は statisch である。
- 2 「～ている」を付加した場合に BZ（被観察時）における「進行状態」として解釈できる場合、「～ている」の直前の動詞句は durativ-dynamisch である。
- 3 「～ている」を付加した場合に BZ（被観察時）における「進行状態」として解釈できない場合、「～ている」の直前の動詞句は punktuell-dynamisch である。

もう一つ、これは Lötscher (1974, 1976) 及び金田一 (1950) などを応用するものであるが、「～始める」、„beginnen“ を付加できるのは durativ-dynamisch な動詞句だけであるから、これも基準となる。

- (8a) Er beginnt zu arbeiten. („arbeiten“ = durativ-dynamisch)
 (8b) 彼は働き始める。（「働く」 = durativ-dynamisch)
- (9a) * Er beginnt, ins Kino zu gehen. („ins Kino gehen“ = punktuell-dynamisch)
 (9b) * 彼は、映画に行き始める。（「映画に行く」= punktuell-dynamisch)
 （ただし、(9a), (9b) は習慣の開始としては可能であろう。）

punktuell-dynamisch な動詞句では、行為・現象などが点として表されるのに対して、durativ-dynamisch な動詞句で表される行為・現象には必ずその開始と終了 / 中

小坂光一

止/完了がある。そして、その開始と終了/中止/完了の間にはさらに、「～ている」で表しうる「進行状態」(Verlauf)が存在する。

今、「開始と終了/中止/完了」と述べたが、「終了/中止」と「完了」の間には相違がある。

- (10a) 彼は事務室で働く。
- (10b) 彼は事務室で働いていた。
- (11a) 彼は修士論文を書く。
- (11b) 彼は修士論文を書いていた。

「事務室で働いていた」ということは「事務室で働いた」ことを意味するが、「修士論文を書いていた」ということは必ずしも「修士論文を書いた」ことにはならない。durativ-dynamisch な動詞句にはこのように、「開始すれば行為・現象が成立する」と「完了しなければ行為・現象が成立しない」ものがある。前者を imperfektiv (非完了的)、後者を perfektiv (完了的) と呼ぶことにしたい。³ punktuell-dynamisch な動詞句の場合は「開始」は表現されず、「完了」でもって行為・現象が成立するので、常に perfektiv である。perfektiv か imperfektiv かを判断するには「～するのに～時間を必要とする」、「zwei Stunden brauchen, um zu ...」が可能かどうかのテストが有効であると思われる。⁴ よって、動詞句をここではさしあたり⁵ 次のように分類しておきたい。

1. statisch
2. punktuell-dynamisch(perfektiv)
3. durativ-dynamisch-imperfektiv
4. durativ-dynamisch-perfektiv

日本語の「テイル形」にどれだけのヴァリエーションがあるかは議論の対象となる問題である。筆者は基本的に次の4種類を提案してきた。

³ ここで言う *perfektiv*, *imperfektiv* というのは一般的に「限界動詞」/「非限界動詞」と言われる場合の「限界」、「非限界」に対応する。
⁴ このテストは Lötscher (1976) の応用である。
⁵ 「さしあたり」というのは、筆者はすでに statisch な動詞句を punktuell なものと durativ なものに分類したからである (Kosaka (1991) 参照)。

「～ている1」(いわゆる進行形)

durativ-dynamisch な動詞(句)から作られる。行為・現象の開始後の、BZ(被観察時)における状態を表現する。

次郎は今、プールで泳いでいる。(「プールで泳ぐ」= durativ-dynamisch-imperfektiv)

花子は今、先生に手紙を書いている。(「手紙を書く」= durativ-dynamisch-perfektiv)

「～ている2」(結果の状態)

punktuell-dynamisch な動詞句の一部から作られる。行為・現象の成立後の、BZ(被観察時)における状態を表現する。

三郎は今、東京に行っている。(「東京へ行く」= punktuell-dynamisch(perfektiv))

「～ている3」(完了)

durativ-dynamisch-perfektiv な動詞句と punktuell-dynamisch な動詞句から、換言すれば、perfektiv な動詞句から作られる。EZ(評価基準時)以前における完了を表現する。

花子はもう手紙を書いている。(=「もう書き終わった」の意味で。ただし、「もう手紙を書き始めた」という、いわゆる「～ている1」の解釈も可能。

「手紙を書く」= durativ-dynamisch-perfektiv)

三郎はもう東京に行っている。(ただし、「～ている2」の解釈も可能。「東京へ行く」= punktuell-dynamisch(perfektiv))

「～ている4」(回想・確認)

dynamisch な動詞(句)から作られる。SZ(発話時)以前(=BZ)における行為・現象を表現する。

三郎は先月も東京へ行っている。(「東京へ行く」= punktuell-dynamisch(perfektiv))

小坂光一

次郎はきのうもプールで泳いでいる。(「プールで泳ぐ」 = durativ-dynamisch-imperfektiv)

花子は先週も先生に手紙を書いている。(「手紙を書く」 = durativ-dynamisch-perfektiv)

この中で今特に問題となるのはおそらく「～ている2」、「～ている3」及び「～ている4」であろう。特に「～ている2」と「～ている3」はしばしば混同されることがある。

(12) 三郎がここに来た。

(12a) 三郎は今ここに来ている。(「～ている2」)

(12b) 三郎はもうすでにここに来ている。(「～ている3」、「～ている2」)

「～ている2」の解釈をした場合は(12a)も(12b)も基本的に同じ意味であり、SZ(発話時)を含む「現在」という Zeitintervall (= BZ)において「三郎がここにいる」ことを意味する。「～ている3」(の現在形)の方は基本的意味を変えずに「タ形」で置き換えることができる((12b'))が、「～ている2」(の現在形)は「タ形」に置き換えると基本的意味の違いが生じる((12a'))。

(12a') 三郎は今ここに来た。

(12b') 三郎はもうすでにここに来た。

(12a')は「今」という Zeitintervall 内にありながらもSZ(発話時)よりは前という時間において「来る」という事象が成立したことを意味する。すなわち、「三郎が来た」のはSZ(発話時)の直前である。一方(12a)の「今」は「来る」という事象の成立した時間のBZ(被観察時)ではなく「ここにいる」という状態のBZ(被観察時)である。三郎がいつ来たかは示されていない。

(12b)に2つの解釈が可能な理由は次のように説明できよう。

a) 三郎はもうすでにここに[来て]いる 三郎はもうすでにここにいる (「～ている2」の解釈)

b) 三郎は[もうすでにここに来]ている 三郎はもうすでにここに来た (「～ている3」の解釈)

次は「～ている3」が可能で「～ている2」の方が不適格な例である。

- (13) 被害者が死んだ。
 (13a) *被害者は今死んでいる。（*「～ている2」）
 (13b) 被害者はもう死んでいる。（「～ている3」）

ここで要約するならば、「～ている2」はBZ（被観察時）における主体（主語）の状態を表現し、「～ている3」はEZ（評価基準時）以前における事象の完了を表すと言える。上例の「～ている」はすべて現在形であるから、SZ（発話時）を含む「現在」というZeitintervall（=BZ）における「主体の状態」（「～ている2」の場合）か、SZ（発話時）（=EZ）以前における「事象の完了」（「～ている3」の場合）かの違いになる。「～ている」が過去形になっている例もあげておこう。

- (14a) 私が家へ帰ったら、ちょうど太郎が来ていた。（「～ている2」、「私が家へ帰った」とき = BZ）
 (14b) 私が家に帰ったら、太郎はもう来ていた。（「～ている3」、「私が家へ帰った」とき = EZ。ただし、「私が家へ帰った」ときをBZとする「～ている2」の解釈も可）

また、「～ている2」はpunktuell-dynamischな動詞句（の一部）からのみ作られ得るが、「～ている3」はpunktuell-dynamischな動詞句からだけでなく、durativ-dynamisch-perfektivな動詞句からも作られ得る。punktuell-dynamischな動詞句は常にperfektivであるから、「～ている3」の方はpunktuellであるとかdurativであるとかという性質と関係するのではなく、„perfektiv“という性質に結び付いたものであるとすることができよう。換言すれば、上述の4つの「～ている」は同一平面に並列的に並べられる性質のものではなく、階層的なものである。これまでの観察を図示すると次の図1もしくは図2のようになる。

小坂光一

図 1

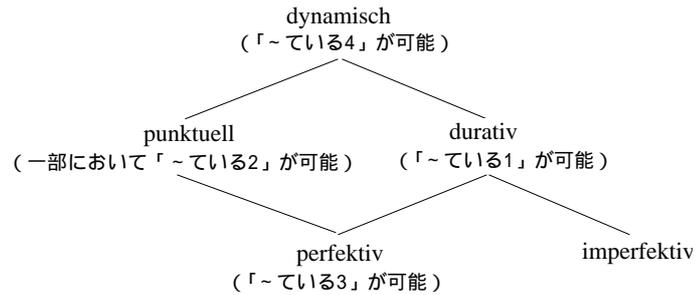
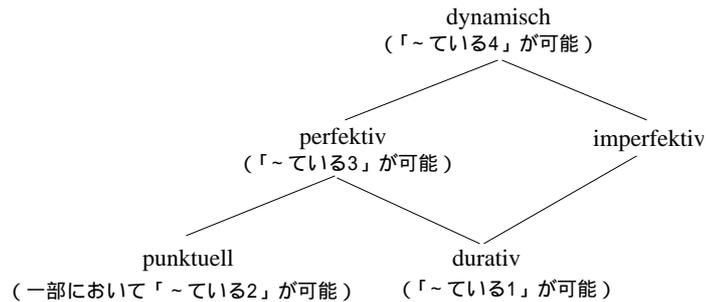


図 2



3. 「タ形」と「テイル形」の関係 (1)

ここで問題とするのは「～た」と「～ている3」の関係である。「～ている3」はEZ(評価基準時)以前における事象の完了を表す。そして、EZ(評価基準時)はSZ(発話時)と重なることもあるが、SZ(発話時)以前のこともあるし、SZ(発話時)以後のこともある。EZ(評価基準時)がSZ(発話時)と重なる場合に「～た」との間に互換性があることはすでに述べたが、時称(Tempus)という観点から見た場合、「～た」は過去形であり、「～ている」は現在形であるから、何らかの相違があるはずである。さらに、「～ている」という形が「statischであることを示す形態」であることも気になる。

小坂(2000)において述べたように、同一表現であっても、「事象の成立」を表すか「命題の存在」を表すかの二通りの解釈が可能である。

- (1) 彼は明日ウイーンへ行く。
- (1a) 「彼がウイーンへ行く」という事象が BZ(被観察時=「明日」)の範囲内において成立する。
- (1b) 「彼が明日ウイーンへ行く」という命題が SZ(発話時=「今」)において存在する。

そして、通常はこの区別は重要でないが、条件文などでは重要な意味を持つということについても述べた。ここではこの考え方を「夕形」と「テイル形」(「~ている3」)の関係に当てはめてみよう。なお、「~ている3」を「~ている2」と区別するために、とりあえず durativ-dynamisch-perfektiv な動詞句からなる文を使用することにする。また、「~ている4」と区別するために BZ(被観察時)を明示しないで、単に BZ(被観察時)が SZ(発話時)より前であることのみを示す文脈を用いることにする。

- (2) 太郎はもう修士論文をほとんど書いた。
- (3) 太郎はもう修士論文をほとんど書いている。(「書き終わった」の解釈で)

ここで次のような仮説を立ててみる。

- 1.(2)は「太郎が修士論文をほとんど書く(書き終わる)」という事象が SZ(発話時)以前(=EZ)に成立したことを表す。
- 2.(3)は「太郎が SZ 以前に修士論文をほとんど書いた(書き終わった)」という事実⁶(成立した命題内容)が EZ(評価基準時。この場合は SZ と重なる)において存在することを意味する。(「~ている3」=「[~た]+[(て)いる]」という解釈)

⁶ これを「事実」という語で表現すべきか、あるいは「コト」、「ことがら」、「命題」などの語で表現すべきか目下のところ明らかにできない。「~た」というのはすでに成立したことがらであるから、「事実」という表現を使ってもあながち不当であるとは言えないと思われるので、一応「事実」という語を使用することにする。

「修士論文をほとんど書く」という事象そのものは SZ (発話時) 以前に成立したわけであるから、「修士論文をほとんど書いた」という事実が SZ (発話時) において存在することに変わりはない。従って、「～た」を使っても「～ている³」を使っても、意味に大差はないが、上述の仮説が正しければ、「夕形」の方はどちらかと言えば「事実そのもの」の提示に近いもの(すなわち、かなり客観的な描写に近いもの)であり、また「テイル形」の方は「事実(成立した命題内容)の存在」を顕示したもの(すなわち、SZ との関連を意識したもの)であるというニュアンスが出てくるはずである。

意味に大差はない、と書いたが、それは EZ (評価基準時) が SZ (発話時) と重なることにより、結果的に SZ (発話時) が基準となってしまうからである。しかし、EZ (評価基準時) が SZ (発話時) と重ならない場合は大差が生じる。

- (4) [?] 私が会ったとき、太郎はもう修士論文をほとんど書いた。
「私が(太郎に)会ったとき」= BZ (被観察時)
- (5) 私が会ったとき、太郎はもう修士論文をほとんど書いていた。
「私が(太郎に)会ったとき」= EZ (評価基準時)
- (6) * 明日の今ごろは太郎はもう修士論文をほとんど書いた(だろう)。
「明日の今ごろ」= BZ (被観察時)
- (7) 明日の今ごろは太郎はもう修士論文をほとんど書いている(だろう)。
「明日の今ごろ」= EZ (評価基準時)

(6) と違って、(4) はただ解釈が困難なだけで、構文的には許容される。BZ (被観察時) が SZ (発話時) 以前にあるから、「夕形」の成立条件に抵触しないためである。おそらく、「BZ (=「私が会ったとき」) の範囲内において、太郎がものすごいスピードで修士論文のほとんどを書いた」という解釈ならば(4) も可能であろう。しかし、いずれにせよ、(5) とは意味が異なる。

上記の仮説に基づいた解釈をするならば、(5) は「[～た] で表される事実(成立した命題内容) が EZ (評価基準時、SZ より前) において存在した」ことを、(7) は「[～た] で表される事実(成立した命題内容) が EZ (評価基準時、SZ より後) において存在する」だろうという想定を意味する。

上述の仮説が証明されたわけではないが、ひとまず一般化した記述にすれば次

のようになる。

1. dynamisch な動詞句の「夕形」は、ある事象が SZ (発話時) 以前 (= BZ) に成立したことを表す。
2. 「テイル形」(「~ている3」) は「夕形」で表される事実 (成立した命題内容) が EZ (評価基準時) において存在することを意味する。(「~ている3」= 「[~た] + [(て)いる]」という解釈)

4. 「夕形」と「テイル形」(2)

次に「夕形」と「テイル形」(「~ている4」) の関係を見てみよう。

- (1) 私が現場に到着したとき、被害者はすでに死んでいた。被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んでいる。
 - (1a) 被害者はそのときすでに死んでいた。
 - (1b) 被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んでいる。

ここでは「テイル形」の現在形と過去形が混在している。しかしながら、「被害者が死んだ物理的時間」に相違があるわけではない。我々のこれまでの観察によれば、(1a) の「テイル形」は「~ている3」であり、(1b) の「テイル形」は「~ている4」である。「~ている3」と「~ている4」の相違は、「前者においては『死ぬ』の BZ (被観察時) が EZ (評価基準時) に連続しているが、後者においては『死ぬ』の BZ (被観察時) が SZ (発話時) から切り離されている」ということである。(1a) は EZ (評価基準時) を基準にしているため、「夕形」に置き換えることはできないが、(1b) は SZ (発話時) 基準なので、そのまま「夕形」で置き換えても基本的な意味に変化が生じない。

- (1a') * 被害者はそのときすでに死んだ。
- (1b') 被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んだ。

例文(1)の場合、「~ている3」の方は過去形で表されている。一方、「~ている4」の方は現在形である。対等に比較するために両者を現在形にしてみる。

小坂光一

- (2a) 被害者はすでに死んでいる。(「~ている3」)
- (2b) 被害者はすでに死んだ。
- (3a) 被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んでいる。(「~ている4」)
- (3b) 被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んだ。

この場合、「~ている3」と「~ている4」の区別は表面的には判然としなくなるが、(2a)における「死ぬ」のBZ(被観察時)はEZ(評価基準時。この場合SZと一致する)より前であることが示されているだけで、特定されていない。一方、(3a)のBZ(被観察時)はSZ(発話時)から切り離された「そのときより1時間ほど前」である。

やはり対等に比較するために、今度は(2a)と(3a)を過去形にしてみよう。

- (4) 被害者はすでに死んでいた。
- (5) 被害者はそのときよりも1時間ほど前に死んでいた。

(4)の場合、明示されてはいないが、SZ(発話時)以前のどこかにEZ(評価基準時)があり、そのEZ以前に事象が成立したことを意味している。(5)の場合はどうであろうか。(3a)の「そのときよりも1時間ほど前」は「死ぬ」のBZ(被観察時)であったが、(5)の「そのときよりも1時間ほど前」はもはや「死ぬ」のBZ(被観察時)ではなく、EZ(評価基準時)もしくは「主体の状態」のBZ(被観察時)に変化している。すなわち、「そのときよりも1時間ほど前」は「死ぬ」という事象が成立した時間ではなくなっている。ということは、(5)の「テイル形」は「~ている4」ではなく、「~ている3」もしくは「~ている2」であることを意味する。換言すれば「~ている4」は現在形のみ存在し、その「現在形」は常に「タ形」と互換性がある。直前の動詞句はperfektivなものに制限されず、dynamischでありさえすればいい。

「~ている4」は現在形のみが存在すると述べたが、「発見・確認・思い出し」の過去形との組み合わせで「~ていた」(過去形)になることはある。

- (6) よく調べてみたら、被害者はあのときよりも1時間ほど前に死んでいましたよ。 [被害者はあのときよりも1時間ほど前に死んでいる]ので

あった。

これに関しては本稿の6.において述べる。
本稿の2.で立てた仮説を補えば次のようになる。

1. dynamisch な動詞句の「夕形」は、ある事象が SZ (発話時) 以前に成立したことを表す。
2. 「～ている3」は「夕形」で表される事実(成立した命題内容)が EZ (評価基準時)において存在することを意味する。(「～ている3」=「[～た]+[(て)いる]」という解釈)
3. 「～ている4」は「夕形」で表される事実(成立した命題内容)が SZ (発話時)において存在することを意味する。

しかし、これだけでは不十分である。何故なら、EZ (評価基準時)とSZ (発話時)が一致する場合は「～ている3」と「～ている4」の区別ができなくなるからである。すなわち、「テイル形」の元になる「夕形」について検討する必要が生じる。

5. 「夕形」とその否定形

日本語では「過去形」は「夕形」であるが、「夕形」は必ずしも「過去形」ではない。例えば次のような場合がある。

- (1) 駅に着いたら(私に)電話してください。

本稿ではBZ (被観察時)がSZ (発話時)以前(すなわち「過去」)にある場合のみ扱うことにする。ここでは「夕形」とその否定形について観察してみる。

通常、「ル形」とその否定形「ない」は時称的には単純に一致する。⁷

行く 行かない

⁷ 「知る」「知らない」のように一致しない場合もある。

小坂光一

働く 働かない
英語ができる 英語ができない
仕事をしている 仕事をしていない

ところが、「タ形」になるとこの一致が常に見られるわけではない。例えば次の(2a)では「行った 行かなかった」のように「タ形」の肯定形と否定形が単純に対応しているが、(2b)においてはこの対応がない。

- (2a) 太郎は昨日大学に行った 太郎は昨日大学に行かなかった
* 太郎は昨日大学に行かない
太郎は昨日大学に行っていない(「~ている4」)
- (2b) 太郎はもう大学に行った * 太郎はまだ大学に行かなかった
太郎はまだ大学に行かない
太郎はまだ大学に行っていない(「~ている3」)

同じ動詞を使用してもこのような相違が生じるということから判断すると、「タ形」にも2種類のヴァリエーションがあることが予想される。この2種類を「~た1」、「~た2」と表示することにしよう。

1. 「~た1」

AZ(行為時)をBZ(被観察時)すなわちSZ(発話時)以前における時間(ZeitpunktもしくはZeitintervall)内に特定できる。BZ(被観察時)がSZ(発話時)に連続しない。(2a)を例にとれば、「大学に行く」のAZ(行為時)がSZ(発話時)から切り放された「昨日」というBZ(被観察時)の内部にある。「~た1」はいわゆる「過去形」である。

2. 「~た2」

AZ(行為時)がEZ(評価基準時)以前であることが表示されるだけで、特定されていない。一般的にはAZ(行為時)がSZ(発話時)以前であるとは必ずしも言えず、⁸むしろ「完了形」と言った方がいい。(2b)を例にとれば、「大学に行

く」の AZ (行為時) が EZ (評価基準時)。(2b)の場合は SZ に一致) よりも前であることのみが示されている。すなわち、BZ (被観察時) が EZ (評価基準時) に連続している。

「～た2」の特徴は英語の現在完了形に近い意味構造を持ち、完了を意味する「テイル形」(「～ている3」)と基本的に互換性があるということである。

(2b') 太郎はもう大学に行っている。

もっとも、「行く」は punktuell-dynamisch であり、かつ「～ている2」の解釈が可能なので、(2b')は(2b)の解釈の他に(2b'')の解釈も可能である。

(2b) 太郎はもう大学に行った。

(2b'') 太郎は(今)もう大学にいる。

EZ (評価基準時) が SZ (発話時) と一致しない場合は「～た2」を使用できない。この場合はそれぞれ、「～ている3」の現在形(「～ている」)及び過去形(「～ていた」)が使用される。

(3) 太郎は明日の今ごろはもう論文を終えている(だろう)。(EZ = SZ より後、「明日の今頃」)

(4) 私が電話をしたとき、太郎はもう論文を終えていた。(EZ = SZ より前、「私が電話したとき」)

本稿で問題にするのは主に、EZ (評価基準時) とSZ (発話時) が一致する場合である。

「タ形」とその否定形について考える場合、その「タ形」が「～た1」であるか「～た2」であるかを考慮しなければならない。

(5) 彼は昨日来たかい。(「～た1」)

⁸ 例えば、次のような場合である。

太郎が来たらすぐに食事を始めよう。
たった5000円か。よし、買った。

小坂光一

- (5a) *いや、来ない。
(5b) いや、来なかった。(「彼が来る」という事象が「昨日」という Zeitintervall (= BZ) 内において成立しなかった)
(5c) いや、来ていない。(「~ている4」としてのみ可)
- (6) 彼女は、昨日映画に行ったか。(「~た1」)
(6a) *いや、行かない。
(6b) いや、行かなかった。(「彼女が映画に行く」という事象が「昨日」という Zeitintervall (= BZ) 内において成立しなかった)
(6c) いや、行っていない。(「~ている4」としてのみ可)

以上は「~た1」による質問とそれに対する否定の回答である。(5b) (6b) はそれぞれ、「彼が来るという事象が『昨日』という Zeitintervall の内部において成立しなかった」、「彼女が映画に行くという事象が『昨日』という Zeitintervall の内部において成立しなかった」のように分析できよう。この場合は、質問と否定回答の時称形は単純に一致するので特に問題はないと思われる。

次の文は「~た2」による質問とそれに対する否定の回答である。

- (7) 電車は、もう着いたかい。(「~た2」)
(7a) いや、(まだ)着かない。(「電車が着く」という事象が BZ (= SZ) においてまだ成立しない) BZ における事象の未(不)成立
(7b) *いや、(まだ)着かなかった。SZ 以前 (= BZ) における事象の未(不)成立
(7c) いや、(まだ)着いていない。(「~ている3」)(「電車が着いた」という事実/命題内容が EZ (= SZ) においてまだ存在しない) 「成立」という事実の EZ における未(非)存在
- (8) 太郎はもう大学に行ったかい。(「~た2」)
(8a) いや、(まだ)行かない。(「太郎が大学に行く」という事象が BZ (= SZ) においてまだ成立しない) BZ における事象の未(不)成立
(8b) *いや、(まだ)行かなかった。SZ 以前 (= BZ) における事象の未(不)成立

- (8c) いや、(まだ)行っていない。(「太郎が大学に行った」という事実/命題内容がEZ(=SZ)においてまだ存在しない) 「成立」という事実のEZにおける未(非)存在

以上からわかるように、punktuell-dynamisch な動詞句から派生した「～た2」の否定形としては「～ない」と「～ていない」の2種類が可能であり、しかも、いずれも現在形である。これはEZ(評価基準時)とSZ(発話時)が重なっていること、AZ(行為時)の存在する範囲(=BZ)の始まりが明示されず、終わりがEZ(評価基準時)やSZ(発話時)に一致することに起因すると思われる。すなわち、「事象の未(不)成立」と「『成立』という事実の未(非)存在」が重なるからであろうと思われる。

「～た2」が「～ている3」と互換性を持つということはその動詞句が perfektiv であるということである。しかし、その否定形としての「～ない」が durativ-dynamisch-perfektiv な動詞句から作られた場合はあまり自然でない。この場合は「～ていない」形の方がはるかに自然である。

- (9) お前はあの本をもう読んだか。(「～た2」)
 (9a) ^{??}いや、まだ読まない。(SZにおける事象の未(不)成立)
 (9b) *いや、まだ読まなかった。(BZにおける事象の未(不)成立)
 (9c) いや、まだ読んでいない。(『成立』という事実のEZ=SZにおける未(非)存在)

durativ-dynamisch-perfektiv な動詞句の場合は観察の焦点を事象の開始時にも完了時(終了時)にも合わせることができる。(9)の文そのものは「～た2」から作られたものであり、「あの本を読む」は「読了」を意味するが、「あの本を読む」は dynamisch であると共に perfektiv でもあるので、一般的には「読み始め」にも「読了」にも焦点を合わせることができる。しかしながら否定形「まだ読まない」は通常、「読み始め」の未(不)成立の解釈に傾くように思われる。

「もうあの本を読んでいる」は「もう読み始めた」(「～ている1」の解釈)とも「読み終わった」(「～ている3」の解釈)とも解釈できる。「まだ読んでいない」も同様に、「読み始め」の未(非)存在とも「読了」の未(非)存在とも解釈できる。よって、質問がSZ(発話時)以前における「読了」の成立/未成立を問うものであり、か

小坂光一

つ BZ (被観察時) が SZ (発話時) に連続している場合は、「『読み始め』の未成立」の表現としての (9a) ではなく、「『読了』の未存在」の表現としての (9c) が選ばれることになるのではないだろうか。

6. 「テイル形」と「～のだ」の関係

本稿の 3. において次のような仮説を立てた。

1. dynamisch な動詞句の「タ形」は、ある事象が SZ (発話時) 以前に成立したことを表す。
2. 「～ている3」は「タ形」で表される事実 (成立した命題内容) が EZ (評価基準時) において存在することを意味する。(「～ている3」= 「[～た]+[(て)いる]」という解釈)
3. 「～ている4」は「タ形」で表される事実 (成立した命題内容) が SZ (発話時) において存在することを意味する。)

依然としてこの仮説の正しさが証明されたわけではないが、この仮説を想定することにより、上述のようにさまざまな現象が説明できる。これに「～ている1」と「～ている2」を加えて、「テイル形」全体をまとめると次のようになる。

「～ている1」「事象開始後の過程の存在」

事象の開始後の「過程」が、BZ (被観察時) において存在することを表す。

「～ている2」「事象成立後の主体の状態の存在」

事象の成立後における「主体 (主語) の状態」が、BZ (被観察時) において存在することを表す。

「～ている3」「事象が成立したという事実 (成立した命題内容 = タ形で表される命題内容) の EZ における存在」

事象が成立したという事実 (成立した命題内容 = タ形で表される命題内容) が、EZ (評価基準時) において存在することを表す。

「～ている4」「事象が成立したという事実 (成立した命題内容 = タ形で表される命題内容) の SZ における存在」

事象が成立したという事実（タ形で表される事実 = 成立した命題内容）が、SZ（発話時）において存在することを表す。

以上のように考えると、「テイル形」というものは何かの「存在」を表す形式であり、「テイル形」にさまざまなヴァリエーションがあるのは「存在する物／ことがら」の相違及び存在する時間の相違によるということになる。「テイル形」が事象の「成立」ではなく、事象そのもの（「～ている1」）、事象の結果における主体の状態（「～ている2」）及び事象が成立したという事実／成立した命題内容（「～ている3」と「～ている4」）の「存在」を表すとすれば、「テイル形」はアスペクト的には *statisch* であると言える。

また、これまでの観察によれば「～ている4」には現在形しか存在しないはずである。しかし、実際にはすでに本稿の 3. で触れたように、表面上は過去形で現われることもある。

- (6) よく調べてみたら、被害者はあのとときよりも 1 時間ほど前に死んでいましたよ。

これは「発見・確認・思い出し」の過去形との組み合わせによる現象であると思われる。我々は「発見・確認・思い出し」の過去形というのは SZ（発話時）において存在する命題内容が SZ（発話時）以前から存在していることを表す形式であると記述した。これは「P のだった」で形式化できる。そして、P の動詞句が *statisch* である場合は融合が行われて「のだ」の部分が見えなくなり、時称の「た」だけが表面に残る。P の動詞句が *dynamisch* な場合は融合が行われず、「のだった」がそのまま残る。

- (7) 明日も会議があったよ。
[明日も会議がある] のだった（「ある」 = *statisch*）
- (8) * 明日東京へ行った。
明日東京へ行くんだった。
[明日東京へ行く] のだった（「行く」 = *dynamisch*）

「テイル形」が *statisch* だとすれば、「～ている4」と「のだった」の融合が行わ

小坂光一

れ得る。すなわち、(6)は次の(6')のように解釈することができる。

(6) [被害者はあのときよりも1時間ほど前に死んでいる]のだった。

これは、[[[被害者があのときよりも1時間前に死んだ]という命題内容がSZ(発話時)において存在する]という命題がSZ(発話時)以前から存在した]という複雑な解釈になる。

「テイル形」(「～ている3」、「～ている4」)も「のだ」も命題内容もしくは命題の存在を表すとすれば、両者の違いは何であろうか。本稿では紙面の関係で論じることができないが、それはおそらく次の点にあると思われる。

「テイル形」

存在する命題内容は、すでに成立した客観的「事実」であるか、あるいは何らかの根拠もしくは痕跡から「すでに成立した事実」であると判断された内容である。

「のだ」

存在する命題内容は、一般的には「未実現のことがら」(これから成立すると予想されることがら)や単なる「想定・判断」であっていい。「～たのだ」の場合は「(話者の)判断」の「(話者による)提示」であると言えよう。

従って、成立した命題内容の存在を問う疑問文には「～たのだ」の方がより適切である。

(9a) 昨日買った本、面白かったよ。

(9ba) もう読んだんですか。

(9bb) ??もう読んでいますか。(「読了」を問う質問として)

当然のことながら、両者の間には他にも多くの相違があると思われるが、それに関しては別の機会に論じることにはしたい。

主な参考文献

- Bäuerle, R. (1979): *Temporale Deixis, temporale Frage* (=Ergebnisse und Methoden moderner Sprachwissenschaft Bd. 5), Tübingen.
- Frank, D. (1979): „Abtönungspartikel und Interaktionsmanagement. Tendenziöse Fragen“, in Weydt (1979).
- Helbig, G./Buscha, J. (1986): *Deutsche Grammatik*, Leipzig.
- 今仁生美 (1993): 「否定量化子を前件にもつ条件文について」、益岡隆志編 (1993): 『日本語の条件表現』、東京
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000): 『時・否定と取り立て』、東京
- 金田一春彦 (編) (1976): 『日本語動詞のアスペクト』、東京
- 工藤真由美 (1995): 『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』、東京
- 久野 (1973): 『日本文法研究』東京
- 国立国語研究所 (1985): 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』、東京
- 小坂光一 (1986): 「話法の不変化詞 DENN と体言化の助詞『の』」、佐藤自郎教授還暦記念『独壇文学論文集』
- 小坂光一 (1988¹): 「日本語とドイツ語における『条件文』(1)」、名古屋大学『言語文化論集』9巻第2号
- 小坂光一 (1988²): 「日本語とドイツ語における『条件文』(2)」、名古屋大学『言語文化論集』10巻第1号
- 小坂光一 (1989¹): 「日本語とドイツ語における動詞句の動作様態と時称(1)」、名古屋大学『言語文化論集』10巻第2号
- Kosaka, K. (1989²): „Abtönungspartikel *denn* und Satznominalisierung“, in Harald Weydt (Edit.): *Sprechen mit Partikeln*, Walter de Gruyter, Berlin / New York.
- 小坂光一 (1989³): 「日本語とドイツ語における動詞句の動作様態と時称(2)」、名古屋大学『言語文化論集』11巻第1号
- 小坂光一 (1990¹): 「時と条件」、名古屋大学総合言語センター『言語表現と時間』(特定研究シリーズ1) 1990

- Kosaka, K.(1990²): „Konditionalsätze im Deutschen und im Japanischen“, in Werner Bahner (Edit.): *Proceedings of the XIVth International Congress of Linguists II*, Akademie Verlag, Berlin–Ost
- Kosaka, K.(1991): „Statische Verbalphrasen im Deutschen und im Japanischen“, in *Akten des VIII. Kongresses der IVG*, Iudicium-Verlag, München
- 小坂光一 (1992¹): 「ドイツ語の Modalpartikel とその日本語での対応表現 話法性に関する研究メモ 」、名古屋大学言語文化部『言語表現と人間』(特定研究シリーズ 3)
- 小坂光一 (1992²): 『応用言語科学としての日独語対照研究』、東京
- 小坂光一 (1994): 「発見・確認・思い出しの過去形」、名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会編『ことばの科学』第6号
- 小坂光一 (1995): 「時間と空間のアスペクト」、名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会編『ことばの科学』第7号
- 小坂光一 (1997): 「命題否定と否定命題」、名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会編『ことばの科学』第10号
- 小坂光一 (1998): 「『成立』と『存在』 『融合』に関する覚書 」、名古屋大学言語文化部言語文化研究会編『ことばの科学』第11号
- 小坂光一 (1999): 「意志の客観的描写としての『~(よ)うとしている』」、名古屋大学言語文化部言語文化研究会編『ことばの科学』第12号
- 小坂光一 (2000): 「『成立』と『存在』(2) ドイツ語の場合 」、名古屋大学言語文化部言語文化研究会編『ことばの科学』第13号
- 野田春美 (1997): 『「の(だ)」の機能』、東京
- マクグロイン・H・直美 (1984): 「『のです』の機能」、『月刊言語』Vol. 13, No.1
- 益岡隆志編 (1993): 『日本語の条件表現』、東京
- 町田 健 (1989): 『日本語の時制とアスペクト』、東京
- Weydt, .H. (1979): *Die Partikeln der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter, Berlin / New York.